



日本記者クラブ 記者会見

将棋は日本文化の特異性を反映したもの

羽生 善治 三冠

2006年10月25日

- page 2* 10年前より選択肢が増えた
- page 3* スペシャリストには正面からぶつかる
- page 4* 80通りのうち2、3通りしか考えない
相手の癖や習慣で手を使い分けず
- page 5* いまの将棋は序盤で差がつく
人間とコンピューターの強さは異質
チェスには膨大なデータの蓄積がある
- page 6* 名人戦は大きな財産
強くなる方法論が確立していない
- page 7* 少しずつ普及していくのが一番いい
- page 8* 日本の将棋だけが異質
手を渡すぐらいの感覚が大事
- page 9* ずっと考えているわけではない
- page 10* ボーッとしているのは大事な時間
- page 11* ハンディのつけ方は改良の余地あり
競技の質変わった

© 日本記者クラブ

皆さん、こんにちは。羽生善治です。司会の方からもお話がありましたように、私は将棋の棋士として、ことしがちょうど20年目ということなんです。それで、ちょうどその節目のいいときに、王座戦の連覇を更新することができたということで、大変うれしく思っています。

ただ、連覇の初めのころは昔というか前のことなので、忘れているところもあるんです。積み重ねてきた中でやはりかなり危なかったというか、薄氷を踏む思いというか、そういうことは何回もあったので、ずっと安定してこれたというわけではなくて、かなりツキにも恵まれたとか、めぐり合わせのよさにも恵まれたというところもあるのではないかなと、自分では思っています。

ただ、なかなか一からやるのは難しいことなので、せっかくの大事な記録なので、これを大切に、また次に臨んでいきたいと思っています。

先ほど大山先生の話も出しましたが、時代背景とか、制度とか、昔と今とでは若干違うところがあるので、なかなか比較するのは簡単なことではないと思うんですが、自分自身の中では少しでも近づけるように努力していければいいなというふうに思っています。

いま、36歳なんですけれども、スポーツの世界と違って、将棋の世界はまだ息長く活躍できるというか、続けることができる年齢なので、これからまた新しい境地といえますか、自分なりのよさとか長所とかというのを見つけ出し、発掘してやっていければいいかなと思っています。

簡単ですけども、最初のごあいさつにさせていただきます。

(質疑応答)

木村亮(日経) 今回、羽生王座が15連覇という記録を達成しました。弊社の主催する棋戦ということで、僭越ながら私が代表質問をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

15連覇は、大変な記録なんですけれども、1つに相性のよさみたいなものがあると思う

んです。その相性のよさを示す出来事が今回ありまして、質問じゃないんですが、ちょっとご報告しておきたい。

今期、羽生さんが3連勝で15連覇を果たしたんですけれど、3局目の終わった手数が130手だったんですね。130手というのはどういう意味があるかということ、弊社がことし創刊130周年で、将棋の王座戦でもいろいろイベントをやって、130面指しとかもやっています、それで、130という数字がちょっと頭にこびりついていたわけなんです。羽生先生は、9月27日、ご自身の誕生日にこの記録を達成されたということで、この棋戦とは非常に相性がいいんだなということを感じた次第であります。

15連覇というのがすごいというのは、大体わかりだと思えます。これまでは大山名人の名人戦13連覇という記録がありまして、それを去年の王座戦ですでに更新されていたわけなんです。15回勝ち続ける確率を、ちょっとこの間計算してみたんですけど、5分と5分の勝負であると、3万2000幾つか分の1という数字になります。まあ、神の領域かなという感じがするぐらいの数字であります。

そこでお聞きしたいんですが、15連覇を達成したい今の羽生王座と、10年前に7冠のタイトルを独占した当時の羽生さんと、どっちが強いんだろうという、ちょっと子どもじみた質問から入りたいと思います。

10年前より選択肢が増えた

羽生 これは、取材を受けたときに結構よく聞かれる質問なんですけど、いまの方が明らかに選択肢が増えたという実感があるんですね。未知の場面に出会ったときに、それをどういう状況ととらえて、どういうふうに打開するか、どういうふうにそのピンチから脱出するかとかの方法論とかアイデアというのは、いまの方が確実にたくさん思い浮かびます。それは10年前と比較しても明らかにそうですね。

ただ、これが不思議なことに、じゃあ10年前の自分と勝負をして勝てるかどうかとい

うと、またちょっと別の話だと思っているんです。というのは、いまはそういう意味でいろんな選択肢ができたんですけど、その選択肢ができた分、迷ったり、ためらってしまったり、失敗を恐れてしまったりということがあります。

そういう気持ちの面といいですか、最後の決断の部分で、かなり選択を迫られるというか、いろいろ考えて悩んでしまうということが多くて、10年前のときの方が、むしろそういう選択肢が少なかった分、何も考えずに、怖いもの知らずで前へ進んでいって、それがいい意味で、勢いとか流れとか、そういうものを生んでいたのではないかなというふうに思っています。

ですから、結論としては、勝負をすればわからないんですけども、ただいまの方が、将棋というものへの理解がより深まっているというふうに思っています。

木村 選択肢というお話があったんですけど、単純に考えて、将棋の場合ですと、いろんな戦型がありますよね。大きく分けると、居飛車と振り飛車というような選択肢があって、その中にまた選択肢が、新しい戦法とかいろいろあると思うんです。羽生王座の場合ですと、いろんな戦型を指しこなすというんでしょうか、別に1つの戦法に決めて指すということは全くないわけですね。そういうタイプの棋士が、棋士によっては特定の戦法を得意とする「スペシャリスト」と呼ばれるような棋士と対局することがあるんですけども、そういう棋士と対局してもよく勝っているわけです。

そこで、スペシャリストに勝つのに羽生王座としてどれだけの研究をどういう形でしているのか、というようなことをお聞きしたい。

スペシャリストには正面からぶつかる

羽生 いま、将棋の世界も非常に細分化しているというか、体系化しているということがあって、ものすごく細かいところまで研究とか分析が進んでいます。いわゆる「スペシャリスト」と呼ばれる人は、本当に場合によ

っては、詰みという終わりの場面まで研究しているということもあるんです。

ただ、将棋の世界というのは、結構閉じられた世界というか、狭い世界でやっているの、未知の人と対戦するということは基本的にないわけです。だれがどういう将棋を指してどういうやり方でやってくるかというのは、お互いよくよく知り尽くしているということなんです。ですから、たまに奇襲戦法みたいなことをかけて、それでうまくいくときもあるんですけど、それはただ1回うまくいったというだけで、その後何回も通じるわけではないということです。

そういうスペシャリストと対戦するときには、一回逃げるということ是可以するんですけど、それから先も何十局も、何十年も戦い続けていかななくてはいけないので、やっぱり基本的には正面から一番相手の得意な形にぶつかっていかなくてはいけないなというふうにも思っています。

ただ、いまは本当に情報化の時代なので、あっという間に新しいアイデアとかも広まるので、徹底的に調べて分析して対策を立てられるという面があります。それはそれでかなり大変なことなので、立てやすいとまではいいわかりませんが、かなりそういうデータみたいなものは集めやすいので、それを参考にして対局するという感じですね。

だから、私自身の感触としては、スペシャリストというのは、1人で100人と対戦しているという感じなんですね。つまり1人でその形のすべてを網羅して、それに対して相手の人はどういう戦法でやってくるかわかっているわけですから、棋士が百何十人いますので、その百何十人の分析とか研究に打ち勝てるという自信がないと、まあできないということなのではないかなと思っています。

木村 将棋界の方というのは、ニックネームというんですかね、いろんな戦法に棋士の名前をつけたりというのがわりと好きな業界、という言い方は変ですけども、そういうところがあると思います。谷川先生の「光速の寄せ」とか、あるいは「藤井システム」とかいったものです。

羽生先生の場合ですと、有名な「羽生マジック」というものがあるわけです。何でマジックかというのは、僕らも中身までは全くわからないんですけども、恐らくほかの棋士があまり思いつかないような手で、形勢不明の将棋を有利にもっていったり、あるいは逆転したりというようなことではないかなと、勝手に想像しているんですが。そういう、他の棋士が思いつかないような手をどうやってひねり出しているのかを、もともと発想が違うのか、あるいは自分の手を読み尽くした後に浮かんでくるのか。そのあたりの考え方の一端をお聞かせ願いたいんですが。

80通りのうち2、3通りしか考えない

羽生 自分の中では、取り立てて変わった手をやっているというつもりはないんですね。一番平凡な手というか、普通の手を指していくというのが一番いいと思っているので、極力普通の手を指そうということは意識しています。

ただ、自分が思っている普通の手と、周りの人の思っている普通の手というのは、ここに若干の感覚の差というか、ぶれというか、そういうものはあるのかなというふうにも思っています。1つの場面で思いつく手は、プロだったら、みんなほとんど違いはないと思うんですけど、何を選んでいくかというのは、10回とか20回とか30回と積み重ねていくと、人の個性、違いとなって出てくるのかな、というふうには思っています。

ただいつも本当に思っているんですが、考えているといっても、実際、1つの場面で80通りぐらいあるんですけど、考えている手は、その中のせいぜい2通りとか3通りの手しか考えていないんですね。で、相手のその次の手も80の中での2通りとか3通りの手しか考えていなくて、そうやって結構ものすごい手数になってしまうんです。

ですから、考えているといっても、本当に全体から見ればほんのわずかな小さい部分でしか考えていないということなので、残りの70何通りの中に、おもしろい手とか、今まで見つけていなかった手とか、そういうもの

が隠されているのではないかな、そういうものも意識して見つけていけたらいいな、ということは思っています。

木村 今回15連覇ということなんですけど、通算のタイトル獲得が65期ということです。中原永世十段の記録がいままで64期で、これは2位だったんですが、それを抜いて単独2位になったということで、これも大変な記録であります。1位がだれかという、やっぱり大山名人で、これが80期ですね。羽生先生のこれまでの平均ペースでいくと、あと4～5年で追いつくのではないかなと、勝手な想像はしておるんですけども。

大山先生の場合は、相手をみて指し手を変える、とよくいわれます。盤外戦術を含めて、前夜祭のときに相手より余分に食事をして威嚇するとか、いろんなエピソードをうかがっています。羽生王座の場合に、相手をみてある程度指し手を変えとか、あるいは盤外で何か意識しているとかというようなことはあるんでしょうか。

相手の癖や習慣で手を使い分けず

羽生 もちろん例えば、相手の人がどういうタイプとかというのは、対局の前に調べたりということはします。ですから、明らかにこういう手で、こういう作戦で来るだろうという予想がついていれば、それに対して対策を立てるとことはあるんです。ただ、癖とか習慣とか、そういうのをみて、そこで手を使い分けていくということは、私は全くしないですね。

相手がだれであれ、例えば、1つの場面で自分が考えるベストだと思われる手を指していこうといつも思っているので、この人だからこういう手で行こう、こっちの人のときは手を変えるというようなことはあまりというか、ほとんどしないです。そこがちょっと大山先生とは違うところかな、というふうに思っています。

私も大山先生とは10局ぐらい公式戦で指しているんですけど、やはりそういう独特の洞察力とか、観察力とかいう、勝負どころ

を見きわめる力とか、そういうものは卓越したものがあつたな、と思いました。また、実際対局してみても、勉強になつたというか、ためになつたというか、そういうことはあります。だから、全くそういうやり方を否定しているわけではないんです。

木村 ピーク時の大山先生と、いま対局したらどうでしょうか。

いまの将棋は序盤で差がつく

羽生 1つは、いまの将棋というのは、出だしがすごく変わりました。全盛時代の大山先生といえども、序盤戦でかなり差をつけられてしまうだろうなということはあると思います。

相撲に例えると、立ち会つた瞬間に両回しをがっちり押さえられてしまうような、そういうのがいまの将棋です。両回しを押さえられてしまうと、もう力を出したくても力が出せないということがあつたと思います。それを除けば、本当に乱戦というか力戦というか、定跡とか研究から離れた場面で、力比べというような感じの展開になつたときは、やはり今でももちろんトップクラスの実力だつたんじゃないかなと思います。

木村 ちょっと話が飛ぶんですけど、最近、コンピューターのソフトが相当力をつけてきているという話があります。終盤のかなりぎりぎりの局面で、コンピューターがプロより先に詰みを発見したとか、そんな話も聞きます。コンピューターがそこまで来ているという現実の中で、今後の可能性としてもっと強くなって、プロと互角にやれるのかどうかわかりませんが、そのくらいのレベルまで来たときに、将棋界というのは変わるのか、あるいは変わらないのか、そのへんのところをお聞かせください。

人間とコンピューターの強さは異質

羽生 基本的に、やっぱりコンピューター

の世界でハードは必ず毎年毎年進歩していくので、それに比例して強くなっていくというところはあると思います。ですから、将棋に関していえば、最後、詰みの場面、詰め将棋なんかでは、人間をはるかにしのぐ力を持っている。計算する能力も突出している。

ただ、判断する能力にまだ改善する余地があると思います。だから、計算処理能力だけでこれからもどんどん強くなっていくのか、あるいは人間と同じような判断とか見切りとか、見きわめですね、そういうもので強くなっていくのかというのは、結構興味があります。いまの感じからすると、人間の持っている将棋の強さとコンピューターの持っている将棋の強さというのは、多分、異質のまま進んでいくのではないかなというふうに思います。

どういうことかということ、アマチュア5段の人を仮に例にとつた場合、人間のアマチュア5段の人は、序盤も中盤も終盤も、平均して全部バランスがとれて、それだけの実力があります。コンピューター5段の場合は、序盤が初段ぐらいで、中盤が2～3段ぐらいで、終盤になったら突然プロ級みたいな感じの、非常にアンバランスというか、異質な強さで、総合的に5段というような感じだと思うので、かなりそういう形のまま行くのではないかなというふうに思っています。

コンピューターの場合は、いわゆる人間の持っている知覚というか、生理的に考えたくないところを取り除くという発想がないので、そういうところから、また何か違う可能性みたいなものも出てくるのではないかなというふうにも思っています。ただし、これから先どうなるかというのは、私自身もよくわからないというのが実感です。

木村 羽生先生はご存じのとおりチェスが大変お得意で、チェスとコンピューターもまた結構トップ同士で勝負したりしていますけれども、そのへんとの絡みでいくとどうなんでしょうか。

チェスには膨大なデータの蓄積がある

羽生 チェスとコンピューターの場合は、

膨大なデータベースを持っているというのが強さのもとですね。例えば序盤でいえば、何百万局という実戦データが入っていて、終盤も駒数がどんどん少なくなってきましたから、残り5枚になれば完全に正しい答えを見つけれられるということがあると思います。やはりそういう蓄積というか、知識としての容量というか、それがあるというのが1つ大きな強みであるとは思っています。

だから、そういう面ではちょっと将棋の世界とは違うところがあるのかなというふうには思います。将棋の世界はまだまだそれほど膨大な量のデータもないですし、終盤の体系化というか、分類が、駒の数が少なくならないためにできないというところがあるので、そのへんは多分チェスの世界とは違うところかなというふうには思っています。

木村 ことし、将棋界では名人戦問題が大変話題になりまして、毎日か朝日かというような話がずっと取りざたされたわけです。その中で、いま一応の結論が出た格好にはなっているんですが、そのことで羽生王座が発言すれば、世間が相当注目するだろうなということがかなり想定される状況の中で、あえてご自分の考えを明らかにされたというふうと思うんです。そのあたりの理由、あるいはいまはまだ結末ではないんですが、落ちつきそうな方向についてどう考えていらっしゃるか、お聞きしたいです。

名人戦は大きな財産

羽生 将棋連盟の臨時総会が8月1日にあったんですけど、やっぱりその前にいろんな人から尋ねられる機会が多かったので、いろいろな憶測を呼ぶよりは、自分の中ではっきりしておいた方がいいのではないかなというような判断をしたということは1つありますね。

ただ、それによって思いがけない方向に進んでいくとか、またそれが波紋を呼ぶというのは、あんまり本意ではないことでした。

いまは、共催の方向で話が進んでいるということなので、そういう意味では棋士の1人

として大変ありがたいなというふうに思っています。名人戦はもともと江戸時代の家元の称号で、長い歴史と伝統を誇っているものですから、将棋界にとっても大変大きな財産というか、受け継いでいかななくてはいけないものなので、それを大切に、いい方向に進めていかなければいけないなというふうに思っています。

中島勝（NHK） 昔から考えていて、答えがないものですから、いい機会なので、女性プロ棋士について羽生先生にうかがいたいんです。何でこんなに男女の実力差が歴然としているのか。ゴルフの世界では、例えばミシェル・ウィーとか宮里藍さんなんかが、男女イーブンで挑戦して、みんなはじき返されていますけれども、これは体力差というものがあるだろうということで説明はつくんですが、将棋については、体力勝負なのか。頭脳の勝負だとすると、何でこんなに差があるのか、羽生先生はどういうふうに説明なさるのか、ちょっとうかがいたいと思います。

強くなる方法論が確立していない

羽生 恐らくまず最初にいえるのは、やっぱり将棋を指している人の男女の比率が全く違うということ。女性の数が圧倒的に少ないということが1つあると思いますね。ですから、もっと女性で将棋を指す人が増えてくれば、それこそ男性と互角に戦える女性のプロの人というのも当然あらわれるということはあると思います。

もう一つは、いままでどうやったら強くなれるかという、その方法論みたいなものが、実はまだ将棋の世界にはできていなかったのではないかな、と。例えば、ゴルフの世界でしたら、非常にたくさんの競技人口もいて、たくさん教える人もいるので、メソッドというか、こういうふうにやればこういうふうになる。例えば、女性を伸ばすとなったら、こういう練習をすればいいとか、そういう理論とか方法論というのがかなり確立されているのではないかな、と。

将棋の世界はまだまだそういうところが

未整備というか、きちんとしたものができていないという、その2点が大きいのかなというふうには思っています。

ですから、もともと潜在的な力というか、能力とかということとは、私は全然関係がないことだと思っているので、10年先になるか、20年先になるかわからないですけど、やがてそういう人が必ずあらわれるだろうと思っています。

森田昌芳（中日新聞出身） 先生の応援団の1人として、これからのご活躍をお祈りしております。

きょうは2つの点に絞って、ちょっとお考えをうかがいたいと思います。1つは、先生のご本の『決断力』の中で、おや？と思った箇所があったので、もうちょっと説明してもらえればと思います。それは、将棋の世界は狂気の世界である、と。狂気の世界で、これに入ったらもう出られない。入り口はわかるけど、出口がわからない。だから私は、入り口はわかってるけど、入るのをためらっているというような趣旨の文章がございました。

私はアマチュアの1人として将棋を楽しむ程度なんですけれど、将棋は奥深い世界であるということは、指してみても何となくわかるような気がするんです。駒の変化は10の200乗とか、天文学的な数字ですから、非常に複雑で奥深いものだというのはわかりますが、狂気の世界というのは、初めて聞いたようなわけで、この点についてちょっとご説明いただきたいというのが1点です。

もう一点は、将棋の国際化の問題なんですけど、囲碁に比べると大分見劣りがすると思います。ただ、欧米、アメリカ、中国、あちこちで同好者がだんだん増えつつあるようで、これからある程度はいくと思いますけど、先生は、国際化についてはどういうお考えを持っていられるのか。

少しずつ普及していくのが一番いい

羽生 まず最初の質問についてですが、要するに、将棋というのは、いつでもどこでも考えようと思えば考えることができるんです

ね。頭の中でその場面を浮かべて駒を動かせば、いつでも、眠っている時間以外は考え続けることができる。ですからある意味、すべてそこで世界が完結してしまうというか、それだけをずっと考えていると、そちらがその世界そのもの、現実のいまいるこの世界とはまた別の世界そのものというところがやっぱりあって、それだけちょっと引き込まれるというか、考え出すと切りがないというか、時間が幾らあっても足りないということがあるので、そういう奥深さとか深遠さというのをやっぱり感じるときがあります。

ですから、もちろんそれでどんどん打ち込んで、深く深くきわめていくというような姿勢も大事だとは思いますが、私自身の場合は、本当に対局のときとか、真剣に研究しなくてはいけないというときには、まあ、一生懸命まじめに集中して考えて、できるだけふだんは将棋のことは忘れるようにしている、そういうところがあります。

ただ、本当にそれは、変な話ですけど、何かおもしろい場面を1つ考え出してしまうと、あっという間に1時間2時間はたってしまうというようなところがあるので、そういう怖さというか、魅力というのがあります。

2つ目の質問ですが、歴史的に振り返っても、日本の将棋というのは、最初はインドから始まったわけなんですけど、アジアには1国に1つその国の将棋があるということなので、そういう意味で、なかなか日本の将棋だけを広めていくというのは簡単なことではないのかなということ。また、文字が漢字なので、そのあたりもちょっと壁としてはあるのかなというふうには思っています。

ただ結構、知らぬ間に広まっているという言い方は変なんですけども、例えば、中国の上海なんかの場合ですと、自然発生的に普及していった、愛好者数が増えていったりしています。ウクライナもいま増えているところの1つなんですけど。そういうところも、別にこちらから何か働きかけをして広まったというわけではないんですが、知らぬ間にといい方は変なんですけど、そういう形で広まっていった、少しずつではあるとは思いますが、これから先、広まっていくんではないかなということを思っています。

将棋に興味を持つ外国人というのは、やっぱり日本に興味を持っているという人が非常に多いと思うので、日本の文化とか歴史とか、そういうものとあわせて広まっていく形。急にものすごく数が増えるというわけではないと思うんですが、少しずつ普及していくというか、少しずつ浸透していくという形が一番いいのではないかな、というふうに思っています。

森田 いまの話ですけど、将棋の駒を、例えばチェスのように立体化してみるとか、そんなような工夫というのはあり得ませんか。

羽生 いや、英語の文字で駒をつくっているというか、もう知らぬ間にやっているという感じなんです。ですから、何ていうんでしょうかね、いまはそういう意味では、思わぬところから広がりを見せていくんじゃないかなという気はしているんですけど。

森田 世界中にいろんな将棋がありますけど、多分日本の将棋ほどゲームとしてうまくできているものはないんじゃないかと思うんですね。私は、世界最高のゲームであるという宣伝がもうちょっとできるんじゃないかという気がしてしょうがないんですけども、チェスなんかよりは圧倒的にすぐれていますよね、そう思いませんか。

日本の将棋だけが異質

羽生 異質ということなんですね。つまり、日本の将棋だけが非常に異質なんです。だから、例えばチェスと将棋を比較するとわかりにくくなってしまうので、そこに例えば中国の将棋とか、朝鮮の将棋とか、タイの将棋とかを入れると非常にわかりやすいんですけど、それを全部比較したときに、日本の将棋だけ突出して異質なんです。むしろ、そういうものは囲碁に近いぐらいの感じなんです、カテゴリーで分類するとですね。

どういうことかということ、つまり他のものは、基本的にどんどん積み重ねていって、どちらが多いかという感じの勝負なんですけど、

将棋は、取った駒をまた再利用するという、そういう特殊なルールをつくったということなので、それによって質が変わってしまったというか、中身が大きく変わってしまったということはありません。

ですから、それは先ほどの話のところに帰るんですけど、日本に興味を持ったというときに、将棋というものに出会ったときに、異質とか、すごくユニークな考え方や発想であるとか、そういうところが非常に色濃く反映されているのではないかなというふうに思っています。

例えばルールでも、チェスの場合はどんどん駒の数を足していって強くして、駒の力を強くすることによっておもしろさを維持しているんですね。でも将棋は逆で、どんどん駒の数は減っていき、力を弱くして弱くして、極限まで弱くして、それでもなおかつ興味が尽きないというか、ぎりぎりのところまで削っていく。

だから、何か私は、短歌とか俳句と非常に似ていると思うんですね。何かこう、いいたいことを極力極限まで削っていき、その中に万感の思いを込めるというか、気持ちを込めるところと、将棋のルールの生い立ちとか形というのは、やっぱり非常に共通しているものがあるのではないかなというふうに思っています。

サクラ・ケージュ（ジャパントイムズ）

羽生先生と同年年ですので、すごく親近感を持っています。私は、古武道の居合道というものを11年やっているんですが、その中で、よく自分の師匠に、大会とか昇段審査のときに、平常心がすごく大事といわれるんですね。羽生先生は、名人戦とか、そういう大変な重圧の中で平常心をどういうふうに保っているのかということと、保つためにどういうところを意識されているんですか。

手を渡すぐらいの感覚が大事

羽生 平常心というのは、常にそれを維持すればベストなんですけど。やっぱり実際、対局が始まって「お願いします」というとき

は、きょうは落ちついて平常心で行こうと思いますけど、なかなか最後までそれを維持するというのは難しいですね。

ただ例えば、何か手を考えていくときに、強い手ばかりをやればいいということではないということが常にあるので、むしろ何かうまく力を抜いて、手を渡すぐらいの感覚でやればいいというところがあると思います。

将棋というのは、一手指した瞬間に自力が消えてしまうので、その次の手は相手の好きなようにできる他力なので、自分だけではもうどうすることもできないとか、何もできないということ、そういうケースが非常によくあるものですから、やはりそういう不安に打ち勝って、身をゆだねるという言い方は変なんですけど、そういう感覚を大事にしてやっていけたらいいなということを思っています。

もちろん厳しい勝負なので、一手一手厳しい手が返ってくるんですけど、その中にやりがいとか充実感とか、自分の能力を振り絞っているとか、そういうものの中に、楽しさとか、棋士としての意義とか、そういうものを見い出していくことが、ご質問された平常心を保つことと非常に関連しているのではないかなと思っています。

長野章夫（NHK出身） もう10年以上も前になりますか、このクラブに大山名人がおみえになりまして、今日のようにお話しされたことがあるんです。そのときに「対局前に、何か心がけていることがありますか」とお聞きしましたら、大山名人は例えば対局場所の旅館に行ったときに、まず非常口の場所だとか、廊下のつながり、出入口、トイレ、そういうのも必ず全部調べる。そうすると何か安心して対局ができるというようなお話をされて、出席者がちょっとほっとしたとか、あれっ？というような感じでうかがったことがあるんです。前の質問との関連にもなりますけど、そのへんのところで羽生先生が心がけていることがありますでしょうか。

ずっと考えているわけではない

羽生 ずっと考えているというわけでは

ないんですよね。ですから、例えば2日間の対局があるといっても、朝から晩まで2日間丸々考えているということはないんです。

これは不思議なんですけど、2日間1つの部屋に、同じ場所に居続けるという人はなかなかいないと思うんですが、行った対局場が、結構絵というか写真というか、そういう感じで頭の中に記憶として残っているんですね。

だから、その場所にもう一回行くと、あ、そういえば、前来たときは、だれだれと対局して、いつごろで、こういう天気だったとか、猫が昼寝していたとか、こういう夕陽だったとか、1日その場所に居続けて、外の景色とかも眺めているので、そういうことは結構記憶に残っています。

将棋のことよりも、何か全然関係ないことの方が記憶に残るというケースもよくあって、この場所に行ったときには、お昼のメニューにこういうものが出てきたとか、全然関係ないことを結構覚えていたり、そういうことはありますね。特にタイトル戦のときなんかはそうなんですけど、まあ、ちょっと日常から離れた、違う場所にやってきたという感覚はすごくあります。

伊波新之助（朝日出身） ぜひ永世名人を近いうちにお取りいただけるようにお祈りしております。昨日は負けて、非常に残念でございましたが、頑張ってください。

羽生 はい。

伊波 精神の休養法と、それから勉強法。勉強法については、7～8時間やるのは勉強とはいえないんだ、もっとやらなくちゃ勉強じゃないんだ、というふうに棋士の方でおっしゃる方もいます。それはやっぱりパソコンが発明されて、非常に効率よくできるようになったということでしょうか。それとも、そういうことより、自分で考えることの方が大事ということなんでしょうか。

それから休養法ですが、先ほど、ふだんは何もしないようにならっしゃるとおっしゃいましたが、例えば、名人戦により集中しようと思って、王位戦を軽くみるとか、そう

というようなことはなくて、目の前のことはやはり全力を尽くすという、そういうやり方なんでしょうか。

それから、羽生さんが結婚されて、ちょっと調子が落ちたかな、と思ったときがあります。例えば、順位戦なんかに行くときに、「お父さん、ごみ出してってちょうだい」なんていわれたら、やっぱりちょっと調子が狂うかなというふうにも思うんですけれども、そういう影響はありましたでしょうか。

ボーッとしているのは大事な時間

羽生 まず、休養のことなんですけど、本当に何も考えないでボーッとしているっていうのがすごく自分の中では大事な時間というか、大切な時間ということですね、そういう時間があると、また次に考えるときに、考えるゆとりが生まれるというか、余裕が生まれるというか、そこでアイデアが浮かんだりとかということなので、何もしないというのは非常に大事なことはないかなというふうに思っています。ですから、休みのときなんかはそういう時間をとるようにしたりはしていますね。

次の勉強法なんですけど、いまは確かにすごく情報化の時代なので、知識を学ぶことになり時間をとられてしまうというのは、事実としてあると思うんですね。これは最低限知っておかなくてはいけない、常識として、知識として、将棋のプロとして知っておかなきゃいけないというのがるので、それを調べるのにある程度の時間を費やさなければいけないということはあると思います。

ただ、それはもちろん勉強にはなっているんですが、それに多くの時間を費やしてしまうと、そこから新たに分析して、自分なりの評価を加えたり、アイデアを加えたりというのができなくなってくるということもあると思います。そういうことに多くの時間を費やせば費やすほど先入観とかが生まれてしまうので、そのあたりの兼ね合いとかバランスというのは、常にとり続けなければいけないということだと思います。

ですから、それは先ほど出た休養ともかな

り関連していることなんですけれども、そういう時間をとることによって、詰め込んでいく知識というのをある意味で忘れて、またフレッシュな目で、自分はどう思うかということを考えるということはやったりしますね。

結婚して、実は家事というのはほとんどとっていいぐらいしないというか、できないんで、生活全般は全く変わらなかった、とまではいわないですけど、ほとんど変わらなかったというような感じはしています。

棋士の生活というのは、かなりばらつきがあるというか、日課みたいなものがないので、最初、多分そういうのはどういう感じかというのはわからなかったと思うんです。けれども、もう10年たっていますので、そのへんのところはすごくよく知っていて、理解していると思っています。例えば、対局の前、すごく考えたそうだなというようなときには、静かにしているとかなんかというのは、自然な配慮としてやってもらっているという感じです。

柴田鉄治(司会・企画委員:朝日出身) 私は囲碁も将棋も大好きで、いつも囲碁と将棋のことを一緒に考えているんですが、どちらかという将棋の方が好きくらいなんです。その将棋の方が好きな自分として、囲碁に比べてちょっと残念だと思うことが2つあるんですよね。

1つは、先ほど出た国際化の問題です。将棋は世界一のゲームだと思います。世界に知らせるのは、メディアの問題でもあり、そこにわれわれの役割もあるのかな、と思っています。

もう一つちょっと残念に思うのは、ハンディキャップですね。つまり実力が違う人が戦うときに、囲碁は石を置いていくわけですけど、将棋はこまを落としていくわけですね。ところが、二枚落ちになりますと、盤面の飛車と角は2枚になっちゃうわけですね。そういうことで違う将棋になっていくという感じがしてしょうがないんですね。ですから、もっとハンディキャップというものをうまくつくりあげたら、将棋はもっと普及すると私は常々思っているんです。

例えば、二枚落ちならば、飛車、角のど

っちは相手にあげて、駒を減らさないとか、何かとにかく新しいハンディキャップというのを羽生さんに、ぜひ考えていただきたいというように思います。きょうは、このことだけは質問しようと思って来たんですけど。

ハンディのつけ方は改良の余地あり

羽生 確かにハンディキャップというのはむづかしいですね。例えば、将棋を覚えるときには、たくさん駒を落として指すわけなんですけど、取れる駒が少ないので、実は勝負がなかなか終わらないというケースがすごく多くあります。そういう意味では、かなり改良の余地があるのではないかなというふうには思っています。

例えば、角を落として相手にその角を持ち駒として渡したら、大体2枚落ちぐらいの感じというふうにはいわれています。そういうハンディキャップのやり方というのは、まだまだ工夫の余地はあるんじゃないかなというふうにも思っています。

これは、先ほどちょっと話の出た、こうやればわかりやすく将棋を学んでいけるとか、取っつきにくくなく自然に入っていけるという方法論みたいなものをつくっていくのと重なるところがあるんじゃないかなというふうにも思っています。そういう意味では、かなりいろいろと考えられると思います。

例えば、駒落ちとかでも、いまは金とか銀を落とすというのはないんですけど、飛車と角だけ残して、それで対局するとか。そうした方がむしろ平手の将棋に近い感じなので、実際、おもしろさというのは残ったまま次に進んでいけるんじゃないかなという意味では、まだまだこれから考えるところはたくさんあると思っています。

佐々木欽三（NHK出身） 多分、木村名人だったかと思うんですが、書かれた本に、素人のかなりうまい、1級なり2級の人と、プロの初段の差というのはものすごくある。ところが、初段と8段の差なんていうのはほんのわずかで、ほとんど初段で実力が完成されて、あとは選択の余地があるんだと。そん

なような例を引いていました。うん、そういうものかなとちょっと昔、思ったんですけど、そのへんのところをうかがえればと思います。

競技の質が変わった

羽生 それこそ1局の単位でみれば、ほとんど差はないというか、プロ同士だったら、だれとだれがやってもかなりいい勝負になるということはあるですね。ですから、それが何十局とか何百局とかという単位になって、やっと差が少しずつあらわれ始めるというところがあると思います。

あと1つ、いま将棋の世界では、ちょっと競技の質が変わったということがあって、前よりも結構短期決戦で勝負がつくようになったという傾向があります。ですから、逆に、若干力の差があっても、最初にリードを奪えれば、結構そのまま逃げ切れるということもあると思うので、そういう意味で、ルールは変わっていないんですけど、競技の質が変わったということも関連しているんじゃないかなというふうには思っています。

ですから、そういう意味では本当に常に紙一重の世界というか、際どいところで争っているというか、対局しているという実感があります。

文責・編集部